

「鳥取ダルク」の活動内容

1) ダルクの始まり

「ダルク」(DARCードラッグ・アディクション・リハビリテーション・センター)は、日本のメリノール宣教会がアメリカ本部から資金援助を受け、アルコール依存症者の回復のためのリハビリテーション施設(MAC)を設立したのがきっかけとなり、当事者である近藤恒夫が1985年にアルコールだけではなく、薬物依存症者の回復施設の必要性をも痛感し、宣教師のロイ・アッセンハイマー氏と共同して設立したものです。

ダルクは設立以来30年を経て、現在では全国60施設以上を数える程に拡大しました。中国地方では現在、「鳥取ダルク」、「岡山ダルク」、「広島ダルク」の3施設が拠点です。

鳥取ダルクは、2005年6月に、岩美町牧谷(山陰海岸国立公園浦富海岸)にあるカトリック教会大阪大司教区の建物を譲り受け、中国地方初のダルクとして設立されました。この施設は以前、教会の保養所として利用されていたために活動スペースは充実しており、自然環境にも恵まれた中で回復プログラムを実施しています。現在、2010年10月26日からNPO法人として活動を行っています。

ダルクでは、毎日様々な薬物依存(アルコールや危険ドラッグ・有機溶剤・覚せい剤・大麻・麻薬・市販薬・処方薬・ガス等)から解放されることを目的としたプログラムを実践しています。薬物依存症者はまず、「今日一日薬物を使わないで生きること」からスタートします。それを毎日更新することによって、薬を使わないクリーンな生き方をし、回復していきます。同じ悩みを持つ仲間と共に「回復と成長」を実現するための居場所を提供し、今までとは違う社会に適応できる生き方をするために、「NA12ステップ」(別紙参照)というプログラムを実践していきます。ダルクでは、セルフヘルプミーティングを中心におき、毎日の夜に開催される自助グループへ参加しています。午後には山登り・ソフトボール・海水浴・スポーツジム・スノーボード等、その地域特性を活かし“薬物以外に関心を持てること”“楽しいと思えること”をするプログラムを取り入れています。スタッフ(職員)は、全員が薬物使用経験者であり、回復者カウンセラー(ピア・カウンセラー)としての役割も担いつつ、薬物依存症という共通の病気の体験を分かち合いながら、共同生活の中で役割分担し、仲間意識を養っています。また、仲間との関係性を良好に保つことで、もう

2度と過去の惨めな自分に戻らないようにと願いつつ、薬を使わない生き方を実践しています。

NA 12ステップ・プログラム

1. 私たちは、アディクション（依存症）に対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
2. 私たちは、自分より偉大な力は、私たちを正気に戻してくれると信じるようになった。
3. 私たちは、私たちの意志と生命を、**自分で理解している神**の配慮にゆだねる決心をした。
4. 私たちは、探し求め、恐れることなく、モラルの棚卸表を作った。
5. 私たちは、神に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
6. 私たちは、これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを、神にゆだねる心の準備が完全にできた。
7. 私たちは、自分の短所を変えてください、と謙虚に神に求めた。
8. 私たちは、私たちが傷つけたすべての人のリストを作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。
9. 私たちは、その人たち、または他の人びとを傷つけないかぎり、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
10. 私たちは、自分の生き方の棚卸を実行し続け、誤ったときは直ちに認めた。
11. 私たちは、**自分で理解している神**との意識的触れ合いを深めるために、私たちに向けられた神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと黙想によって求めた。
12. これらのステップを経た結果、スピリチュアル（霊的）に目覚め、この話をアディクト（依存症者）に伝え、また自分のあらゆることに、この原理を実践するように努力した。

2) 鳥取ダルクにおける活動概要

①薬物依存症者を対象とするリハビリテーション及び施設の運営について

各種プログラムを通して、ダルクではスタッフ（職員）が入寮者の薬物乱用を止めさせるといった「治療者－患者」の関係性はありません。スタッ

フもかつては、薬物依存症に苦しみ、ダルクの活動を通して薬物依存から脱却した、いわゆる回復者スタッフであるため、今まさに薬物依存に苦しんでいる入寮者は、「患者」ではなく「仲間」と捉えています。

スタッフは「仲間」のサポートを行うことで、自分の経験をフルに生かすことができ、また同時に自身の回復のプロセスを進めることに大いに役立っています。ここでダルクの運営上の特徴をまとめると次のようになります。

- ・回復者がスタッフとなり、仲間のサポートをするセルフヘルプ機能を持っていること。
- ・NAの12ステップをベースとしたグループミーティングがプログラムとしての活動の中心であること（毎日AM8：30～10：00 ダルクミーティング、PM7：00～8：30 NAミーティング）。
- ・共同生活を通じて、薬物に依存しないライフスタイルを身につける生活訓練を行っていること。
- ・刑務所、精神科病院、そして家庭および地域をつなぐ中間施設としての役割を担っていること。
- ・誰に対しても回復のドアが開かれているという敷居の低さ。
- ・リラプス（再使用）に対する柔軟な対応に代表される依存症者へ差別、偏見を持たない姿勢。

私たちは現在、鳥取市内をはじめとし、倉吉、米子にも鳥取県内5箇所にもNAのミーティング場を開設し、兵庫県豊岡市にも活動の場を広げています。

また、今まで活動拠点のなかった中国地方におけるアウトリーチ（当事者がいる場所へ赴き、必要な情報やサービスを提供すること）は、当ダルクで最重要視している活動です。今後もこうした活動を通し、ここ中国エリアにおいて人材が育成され、次の活動拠点が生まれ、今まさに苦しんでいる人たちに回復の手が差し伸べられることへとつながります。

②薬物依存症者（当事者）の相談及びメッセージ活動

鳥取ダルクが開設して以来、電話相談も徐々に増えています。また、行政の援助等により鳥取ダルクの活動が「鳥取県・県政だより」に掲載される等、着実に相談窓口としての機能を広げています。

今までたとえば薬物問題について相談できる行政の窓口はあっても、あま

り広報されておらず、どこに相談に行ったらいいか分からなかった相談者が多いことに驚かされます。

また、鳥取ダルクは中国エリア全体をカバーしているため、広範囲の活動をせざるを得ません。特にこうした地方にいる場合、家族が当事者を専門の治療機関につなげるための情報があまりにも乏しく、長い期間当事者を抱え込んでしまい、病気の進んだ依存症者が多いのも特徴の一つです。そういった状況下での相談内容はかなり深刻で一刻を争うようなものも少なくありません。

③薬物依存症者に関する研修事業や調査研究

- ・ 当ダルク・フォーラム開催やアディクション・フォーラムの開催、及びびわこダルク等の各地ダルクで開催されるイベント・薬物依存症者家族会・研修会への参加。
- ・ 薬物依存症者の実態調査に係わる各機関への情報提供。

④薬物依存に関する教育及び啓発活動

これまで行った小・中・高等学校での講演活動を通し、地方における薬物問題の認識には、共通して、対岸の火事的な見解が多くみられ、あまり薬物依存症に対する危機感を持っていない実状があります。

昨今、薬物の入手方法が容易になり、薬物依存症者の低年齢化が進むなか、当事者が自分の体験を語ることで学校へメッセージを運ぶことは、薬物の恐ろしさや、嗜癖行動から生じる諸問題を受けとめていただく大事な機会となります。また、薬物依存症から生じる家族問題や人格形成に与える影響を訴えることにより、地域での薬物乱用防止活動の一端を担っています。

これまで以下の機関への講演活動をしました。

- ・ 小、中、高等学校での講演
- ・ 鳥取県保健福祉センター
- ・ 鳥取県教育委員会
- ・ 鳥取県内の各保護司会
- ・ 鳥取県内の各民生委員会
- ・ 鳥取県内の各更生保護女性会

⑤ 家族相談及び家族会の立ち上げ

現在、中国地方に薬物依存症者家族会は少なく、この広いエリアでどこに相談したらよいのか分からず、苦慮している家族は、相当数おります。

ダルクと連携している薬物依存症者家族会は全国にありますが、この地域に住み、現在薬物を使っている当事者と向き合っている家族は、その対応に追われ、相談相手もないまま手放しできない状況で苦しんでいます。近くにこのような家族会があれば参加できるという家族も多くあります。当事者と同様、家族が共依存から脱却した家族の姿をロールモデルとして、回復に向けた取り組みを実践していく場が必要です。当地でも全国薬物依存症者家族連合会の援助を受け、家族会の立ち上げを準備中です。

⑥ ボランティア活動

私たちは地域（自治会等）における清掃活動、祭事、防災訓練、作業所等の施設主催イベント、NPO主催イベント等、様々なボランティア活動に積極的に参加しています。これらの活動を通して、私たちは地域住民と直接語り合い、また、共働しながら人間としての生きる権利を大切にし、個々の人間としての尊厳を復興したいと願っています。

ダルクでは、賃金という対価の発生する労働だけではなく、人が生きるための価値を得るという本当の意味での「労働」を目指しています。私たちの言う「本当の意味での労働」とは、人が人として生きていくために大切な活動であり、「自己の存在意義」や「自己の認識」を深める取り組みです。

また、ダルクでは人間として自立することを目指しています。この「自立」というのは、「目標・希望・ビジョン」及び、仲間との「信頼・共感・連帯感」を持つという全人格的なものです。社会の生産労働への参加は、その中心柱であることは間違いないのですが、しかし私たちの「労働」とは、自らの存在意義を確認することができる代表的な活動であって、その人の内面的な豊かさをもたらすものです。「薬物依存症者に治癒はありません。しかし、回復はあります」。私たちは、社会の中で「普通」に生きていく「力」と「権利」を求めて、日々のミーティングと同様に定期的に行うボランティア活動を週に2～3回、プログラムとして実践しています。

⑦刑務所への薬物脱却教育及び対象者の受け皿作り

現在の刑務所の過剰収容の原因の1つは、受刑者の4分の1を占める覚せい剤受刑者に対する、法的に定めた期間だけ収容して済ませる定期的処理にあるといわれています。刑務所へのアウトリーチは、ダルクの重要な活動の一つです。スタッフが刑務所に定期的に出向き、当事者の前で自分もかつては薬物依存に苦しんでいたこと、ダルクとの出会いによって回復の道歩んでいることを伝えます。これまでの薬物に依存してきた人生をありのままに語ることは、受刑中の薬物依存症者にとって薬物を断っている仲間の存在を実感でき、大きな励みとなります。「回復モデル」が目の前に登場することは、彼らの心を揺さぶり、「ここを出たら自分も薬物を使わない生き方ができる」という可能性を信じ、断薬への動機付けを高める力を持っています。

また、受刑者の中でも仮釈放対象者は、出所後、身柄引受人が決まっていることもあり、帰住地があります。しかし、満期出所者の多くは、出所したときまた薬物を使用する環境へ戻るしかなく、せっかく本人が薬物脱却の考えがあっても、再使用（リラプス）の確率が高くなります。薬物依存症者の治療においては、受刑生活こそ回復のための大切なプロセスと考えます。出所してすぐにダルクプログラムにつながることは、強制的にではあれ、体から薬物が完全に抜けて何年も経過したこの時期にダルクにつながることで、回復プログラムに取り組む上で有利です。こういった人たちの受け皿をもダルクは積極的に担っています。

この背景には、平成15年5月に「刑事施設及び受刑者処遇法」（かつての監獄法）が全面改正され、「麻薬、覚せい剤、その他の薬物に対する依存がある受刑者」に対しては、改善指導を行うことが義務付けられたことにあります。この法改正がきっかけとなり、法務省よりダルクに対して刑務所内での薬物依存に関する教育内容の充実が要請されるようになりました。

- ・鳥取刑務所にて薬物依存脱却指導教育実施
- ・松江刑務所にて薬物依存脱却指導教育実施
- ・広島刑務所にて薬物依存脱却指導教育実施
- ・岡山刑務所にて薬物依存脱却指導教育実施
- ・四国少年院にて薬物依存脱却指導教育実施

3) これまでの当施設入寮者について

鳥取ダルクは、開設以来、延べ130名以上の入寮者があり、薬物依存症者の回復と自立に向けた支援をしてきました。この内90%が、医療機関（精神科）への受診歴があり、入寮後も65%がいまだ向精神薬を服用せざるを得ない状況にあります。

「精神保健福祉法」第5条（定義）で「精神障害者とは精神作用物質による急性中毒又はその依存症」と示されているように薬物依存症が病気として認知されているものの、その入寮者の精神症状は多様です。彼らは薬物使用以前からの精神疾患を伴うものや、薬物使用による幻覚、妄想状態あるいは、社会的ストレスに対する脆弱性を伴うものまであります。このため精神科への通院治療が長期にわたらざるを得ない人たちも多く存在します。

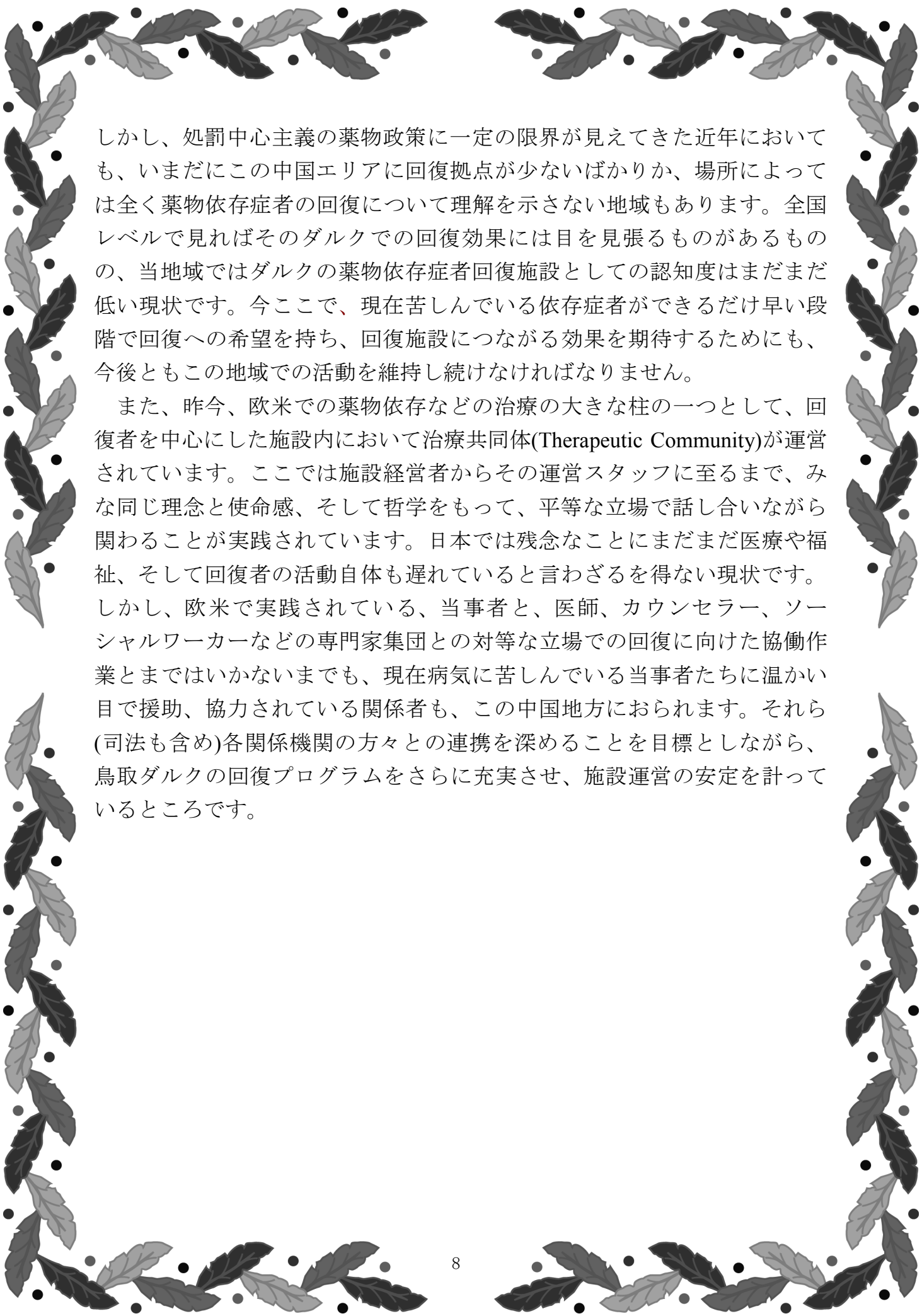
また、幼年期に機能不全家族で育った人たちは、AC（アダルトチルドレン）概念を代表とするように、自己不全感に苦しみ、無力感、孤立感の中で一時的とはいえ、薬物やアルコール摂取でこの様な精神的な痛みを取り除き、生きる力を補いながら生きてきました。

さらに、前記した司法からのアプローチにより、刑務所内での薬物脱却教育において、出所後ダルクでのプログラムを受けたいとの声も多く聞くようになり、その対応を迫られております。

このような回復に向けた施設運営に当たり、幾重の困難な状況が背景にありながらも、地域に薬物依存症者が入寮できる鳥取ダルクという受け皿があることは、目の前で「薬物依存症は回復可能な病気である」ことを証明できる貴重な活動拠点として機能していると考えます。

4) 今後の展望

薬物依存症者による薬物依存症者のためのダルクは、司法的な取り組みを中心としている国の薬物政策とは距離を置きながら、薬物を止めたいと願う当事者から自然発生的に誕生したセルフヘルプ形式のリハビリテーション施設であり、自らアディクションと向き合い薬物を使わない新しい生き方を身につけるための活動をしています。ダルクは、それぞれの地域において医療に限らず、保健、福祉、司法、教育等、様々な分野から注目され、その活動に期待が高まってきています。

A decorative border made of stylized leaves and small black dots surrounds the text. The leaves are in various shades of gray and black, arranged in a symmetrical pattern along the top, bottom, and sides of the page.

しかし、処罰中心主義の薬物政策に一定の限界が見えてきた近年においても、いまだにこの中国エリアに回復拠点が少ないばかりか、場所によっては全く薬物依存症者の回復について理解を示さない地域もあります。全国レベルで見ればそのダルクでの回復効果には目を見張るものがあるものの、当地域ではダルクの薬物依存症者回復施設としての認知度はまだまだ低い現状です。今ここで、現在苦しんでいる依存症者ができるだけ早い段階で回復への希望を持ち、回復施設につながる効果を期待するためにも、今後ともこの地域での活動を維持し続けなければなりません。

また、昨今、欧米での薬物依存などの治療の大きな柱の一つとして、回復者を中心にした施設内において治療共同体(Therapeutic Community)が運営されています。ここでは施設経営者からその運営スタッフに至るまで、みな同じ理念と使命感、そして哲学をもって、平等な立場で話し合いながら関わるのが実践されています。日本では残念なことにまだまだ医療や福祉、そして回復者の活動自体も遅れていると言わざるを得ない現状です。しかし、欧米で実践されている、当事者と、医師、カウンセラー、ソーシャルワーカーなどの専門家集団との対等な立場での回復に向けた協働作業とまではいかないまでも、現在病気に苦しんでいる当事者たちに温かい目で援助、協力されている関係者も、この中国地方におられます。それら(司法も含め)各関係機関の方々との連携を深めることを目標としながら、鳥取ダルクの回復プログラムをさらに充実させ、施設運営の安定を計っているところです。